

ベトナム・フィールドスクール報告

—得られた知見と今後の研究とのつながり—

平成 20 年入学

参加したフィールドスクール：ベトナム

調査地：ベトナム

小田 なら

キーワード：実務，NGO，少数民族，在来，伝統医療

フィールドスクールで得られた知見について（600 字以内）

大学院の研究室内では実務に関する話題に触れることがめったになく、実務家の話をお聞きする機会は無きに等しい。しかし、フィールドスクールでは第一線で活躍されている方々から現在進行中の開発援助の現状をお聞きし、その上で現場に赴くこともできた。講義の後に現場を共に訪問できたことで、実感として経過が理解できた。また、どのような知識や姿勢が実務に必要なのかを考える機会になったと思う。

日本側からは、世界規模の機関からNGOまでさまざまな規模の援助に関わる方々から話を聞くことができたことで、「開発援助」の多様な面を考えるきっかけとなった。また、ベトナム側からは少数民族政策の策定に関わった方にお話を伺えたのも貴重であったが、ベトナム側の実務家の話を他に伺うことができればより良かったのではないと思う。

講義を聞いたりデータを集めたりすることは日本でもできるが、開発援助プログラムの実施現場を見ることはなかなかできない。実務の現場を見ることで、将来の選択肢やフィールドを見る視点が aumentato と感じている。できればプログラム開始前と実施中に、参加者各自の意見や感想を交換し合える時間があればよかっただろう。開発援助に対して、もしくは各自の研究とのかかわりについて意見を交換し合う余裕があれば、フィールドスクールの前後でそれがいいにかわったかを知ることができ、自分自身の考えもより深まったかもしれないからだ。



写真 1: ホアビン省の村にて



写真 2: 別の村で甕酒をいただく

フィールドスクールで学んだことをどのように研究テーマにいかせるか？（400 字以内）

私はベトナムの「伝統医学」の形成過程と、人々の受容・利用法の現状を探りたいと考えている。現在ベトナムではそれぞれベトナム由来の薬、中国漢方、近代西洋医学と分類される「南薬」「北薬」「西薬」が公的に用いられている。前者の二つは伝統医学としてくられ、独立後、医療制度の中に取り入れられた後盛んに研究されている。製薬会社も伝統医療に注目しており、私達が訪問した少数民族の住むホアビンでは従来植えられていない薬用植物の栽培を委託されていた。そこでは薬用植物を「南薬」とは呼ばず、「植物の薬」と呼んでいる。ここで、薬草治療の概念に地域による差が見られることがわかった。

一国の中で「在来」のものとされる事物も、地域や民族によって概念や呼称が異なり、また、伝統医療が隆盛になればなるほど、他民族国家の中では何が在来種なのかという点はつかみにくいようだ。これらを留意することが研究を進める上で重要だと感じた。



写真 3: 訪問した村の集会所には、隣の畑で栽培している薬草の写真が貼られていた